

蟻地獄

藤森 重紀

私が小学校に入学する直前のことだったが、墓参りの帰途、公園のはずれのブランコに乗りたいと母にせがんだことがある。母は面倒くさそうに、一度だけだよ、といって、私の背中を押したのだった。ゆるやかな揺れかたでは満足できなかったため、私はさらに強く押すよう母に頼んだ。まもなく予想以上のいきおいが加わり、たちまちブランコは限界まで舞い上がった。

そのとき、思わず悲鳴をあげたのは私ではない。母は子供のように顔をゆがめると、足踏みするようにな身をもちながら宙に舞う私を見守った。

両足を踏ん張ってちからまかせに漕いだ私が悪いのか、私の要求どおりにした母のせいか分からない。地面に降りてから、初めて私は放心したように全身で泣きだしていた。

途方もなく泣きつつける私を、母はけっして抱きしめたりはしなかった。

あれからまもなくのことだった、母が再婚したのは。

再婚の説明など幼い子供の私にはむろん何もなくて、私の見知らぬ男があらたに加わった、ぎこちない家族の生活があたふたとはじまっていった。

*

軒下の赤土は粘土質のため、日照りがつづくとき苔のようにがちと固まっていく。

地面の乾燥がすすみ無数の亀裂がひろがっていく。それを待っていたように蟻地獄が巣づくりをはじめめる。

ちようど盃くらの深さだった。そこに蟻が足を踏み入れると体の重みで円錐形の中心部に吸い取られるしくみになっているのだ。

今年は台所裏に八つの巣穴ができています。大人たちが忙しそうなのは、蟻地獄をみて私は時間つぶしをする。

巢の前に屈み込んでいると、今来たばかりなのに祖母の声が追っかけてきた。何を急いでいるのか祖母は強引に私をこの場から引き立てようとしていた。私は肘を祖母の胸に押しつけて抵抗する。小学生と年寄りのもみ合いでも蟻地獄たちはびくびくと敏感に反応している。

にわとりにも猫にもほじくられていない。元気でいいぞ。
安心して私は祖母への抵抗を中止する。

いつもは足裏の汚れを注意する祖母なのに、あわただしく私を奥の部屋に連れていくと襖を少し開けて、あの人がお前の新しい父さんなのだよ、と耳もとで突然ささやくのだった。

いきなり、だった。

何のまえぶれもなく、いきなりだった。

広すぎる部屋の正面。

柱に背をもたせかける胡坐をかいた男。

ネズミ色の背広、兵隊さんのような坊主頭。

黒い羽織の老人たちに両脇をはさまれ、煙草を吸ったかと思うと、畳のへりをむしり、歯をむき出し、照れ笑いをくりかえしている男……。

あの人物が、いきなり、何なのだろう。

「かあちゃんは？」

母がいない。

きのうから、いない。

きのう祖母に叱られた母が、今いない。

きのう母は庭はずれの梅の樹の下で小用の後、ぼんやり空をみあげていた。

木の枝に飛びつこうとかがえ、二度三度力エルの恰好をした。それが無駄と分かるスカートのまま樹の幹に手をかけ、すると這いのぼっていった。いつになくみごとな動作だった。母は白い脚をぶらつかせ、熟した実をもぎ取って猿のように食べはじめた。その下を腰の曲がった祖母が通りかかった。

「あれ、またはじまったかね」と祖母は背伸びをしながら悲しそう顔をして、

「あした嫁になるおなごが何つつ真似かね」

早く下りて来い、と両手をひろげて怒鳴った。母は祖母の怒りをはぐらかすように甲高く笑って、ごまかしていた。

しかし睨みあげたままの祖母に根負けしたのか、梅の実を二つばかりもぎとって、ゆっくりと枝から下りてきた。そしてまた奇妙な笑い声をあげた。母の奇妙な笑い声はしばらくぶりのことだった。

つい一と月ほど前、あれは葬式があった夜のことだった。

祖母は母の膝に手をおくくと、みんな終わってしまったんだよ、とうなだれるようにいいはじめた。くどくどと同じことを長い時間いつづけていた。みんな終わってしまったのなら、母の奇妙な病気も終わってよかったはずだと私は思った。

にもかかわらず、祖母が案じる病気がまだ母には居座っていたのだ。

母は日に四往復する木炭バスが停留所を通過すると、突然地面に伏して顔に泥を塗らしたのだ。

町が燃えてる、早く半鐘を鳴らせ。

鳴らせ、鳴らせ。

叫びまくるときのセリフは決まっていた。

また、別の日。夕陽をみながら傍らにいる私を抱きしめ、私の肌に爪を立てて泣きまわった。

「かならず、帰って来っからね。かならずね」

祖母は子供をなだめるようにくり返しながら、私を母から引き離す。

「そんなこといっても……」

ほんとに燃えてんだよお、と母は簡単服の身を揉むようにして涙をぼたぼたこぼしている。祖母はかぶりを横に振りながら、帰ってくるよ、いつかはね、と呪文のようにいいつける。

こつこつという場面でくりかえされた祖母の「帰って来る」という決まり文句はだれを指していたのだったろう。かならず帰って来るという祖母の決まり文句に反し、ついにだれも帰っては来なかったけれど……。

そのかわりのように、柩に入ったちいさな紙切れが届き、やがてちいさな葬式がとりおこなわれたのだった。

死んだ人はだれか、いつものように、だれも私には教えてもくれなかった。

母の病気が再発した翌朝（つまり今日）、目をさますと人の出入りがあわたたしくなっていた。

いつものように、だれも私には何の説明もしない。

昼、化粧した母は祖母や四五人の大人たちと連れ立って、町はずれまで出かけていったようだ。むろん私にはだれも何にもいわなかった。垣根のそばを通る母の顔が青ざめて、とても大きくみえただけだった。その後ろ姿を見送った私は、母家の裏の蟻地獄観察にしばらく時間を費やし、それに飽きると祖母の部屋に入りこんで寝てしまっていたらしい。

きょうに限らず、ひとりっ子だった私は、いつも眠ってばかりいた。つまらないと思うと目をつむった。泣きたいと思うと、泣く前に目をつむった。

新しい父がやって来る日までは夜も母の乳房に吸いつくようにして眠った。小学校三年生なので、そろそろひとりりで寝てよかったのに、私は眠りにおちるまで母の乳首を口に含まないと気がすまなかった。いつも当然のように、私は母の胸に入っていく。母の胸の音がして私を包み込む。小学校に入る以前からずっと聞きつづけてきた母の音だ。乳房に額をあてていると、母の音が伝わってきて私は黙っている。母も何もいわない……。

「こんなもの、要らなくなったよ」

しかし別の日、母はいきり立っていた。

ちから任せに私を突き飛ばした。わけもわからないままにいる私を間にはさみ、日に何回かの祖母と母の争いがはじまっていた。

「要らないっていったって、物でもあるまいし、なんということをいうんだ」

「だから産みたくないよ、いったんだ」

いつものことだが、双方とも興奮すると男のような言葉つきになる。痩せ身の母はますます青ざめ、小肥り気味の祖母は汗か涙かで顔ぜんたいが濡れて光ってくる。

「子供が生まれてから、アレの戦死が判ったんだもの……。いまさらだれを責められるって、いまさら」

そういう日の夜、母の乳房は固く火照って、とても恐ろしかった。昼の興奮が残っているのは確実で、いつ突き飛ばされるか、私も身をこわばらせているほかなかった。

「こつち向いて寝るから、いいよ」

乳房を遠慮して離れかかる私を、母は無言のまま乱暴に引き寄せた。そのいきおいで母

の頬が私の額にふれた。母の涙が私の顔についた。どんなことがあるかと、こうして眠られる日は永久につづくのだと私はそのとき思った。

*

いつしか夜中になっていたようだ。

「かあちゃんは？」

新しい父の来た夜、となりに寝ているはずの母がいなかった。奥座敷で小柄な男をみせられてから、母の姿がなくなって、今もない。

いつから夜になったのだろう。

着替えもしないで眠っていたらしかった。

あかりもなく、まるで暗闇の底にいるようだった。

暗闇が幾重にもなつて黒々と覆いかぶさっているようだった。

こんな夢のときは母にしがみつけばよかったのに、その母も今はいない。

両手で暗闇をかきむしってみた。

蟻地獄に嵌まった蟻のようだった。

暗い地面の底に雁字がらめにされて沈んでいくようで息苦しかった。

ボタンが千切れるほど大声を出して私は助けを求めた。

この叫び声をずっと待ちかまえていたような電灯のともりかたは、いったいどういっわけなのだろう。

「かあちゃんが、いない」

私は起きあがりながら訴えた。入ってきたのは母ではなく祖母だった。無言のままふわりと私に覆い被さると、まるで段取りがきまっているような冷静さで、黙って黙って、と拍子をとるように私の背中を撫でまわした。そして、今はいないけれどこのままおとなしく寝ているんだよ、とこれも落ち着いた声で私を諭すのだった。

母が、いない。

落ち着いて諭されても、私は落ち着けなかった。

母は、この家のどこにもいないということだろうか。そして、あの変な男は帰ったのだろうか。まだまだ私には訊きたいことがあったのに、

「黙って、黙って……」

祖母は、私が寝つくまで電灯を消さないで、同じセリフだけをだれかへの気兼ねみたい
に、ぼそぼそささやきつづけた。

この夜を境い目に、母と眠る習慣が一方的に終わった。

*

そして、あの変な男が私の新しい父親だった。でも新たな父に対して、古い父親など最
初からこの家にはいなかったのだ。

さらに新しい父をなんと呼ぶのか。またしても、母も祖母も、だれも教えてはくれな
かった。ただ、いきなり、ぎこちなく新しいことがはじまっていくだけだった。

ある朝、その男は懸命に湯をわかしていた。たつぷり汲み入れた釜が湯気をあげ、その
いきおいに負けないくらい男の顔もいきいきと元気づいていた。

三月も終わりがけ、水仙のつぼみも一人前になり、富山の薬売りもとくに帰ってしま
ったのに、真冬のような大雪が降った。雪の朝は祖母の容態が悪くなる。咳がつづき、痰
がからんで苦しみます。町の医院まで母が往診を頼みに出かけるとすれば、この雪では午
後になるかもしれない。バスも止まっているかもしれない。

そんな心配をよそに、春の雪は意地悪い生きものめいて降り積もっていった。そのため
ではなかったけれど、母も町へ出かけるなどの用事ではなくなっていた。

暮れかたちかく、それは思いがけないできごとがはじまった。

南側の雨戸をしめた暗室に母は横たわっていた。

「どうしたの？」

どうしたのか、私にはいつものようにまったく説明がなかった。ふだん口をきかない新
しい父に訊ねようと思うが、湯わかし以外にもいろいろ忙しそうで、一言何かいえば、た
だちに怒鳴りとはされかねなかった。病気の祖母も放つたらかきにされていたからだ。

「黙って、食べ」

味噌汁だけ、おかずもない昼飯をいわれたとおり黙って私は食べた。新しい父は頬骨を
いつもより出っ張らせたうえで、猫飯を二杯も三杯もたいらげていた。

食事がすんで炬燵にもぐりこんでいると、母の呻く声がしんとした台所にも聞こえるよ
うになった。奥の部屋にいつてみたい気持ちと、けっして近寄ってはならない気持ちとで
炬燵から這い出た私は祖母の病室に走った。西向きの薬臭い部屋だった。新しい父がやつ

て来て、田植えがすんで、それから祖母は寝込むようになっていた。

冷えた廊下を走ってきたものの、私は祖母の部屋にただちに入りかねて南天の朱い実をもいでいた。片方の手に余るほどもいだとき、一瞬、焼けつくような泣き声が母の寝所からもれてきた。

私の反応はすばやかだった。庭に駆け降りて（実際は赤ん坊の泣き声にはじかれたからだったが）、裸足のままその場から逃げようとしていた。なぜ逃げなければならないのか、気がつくひまもなかった。

桑の枝が頬にあたってぼろぼろ涙が出た。走った分だけ、母からも遠のいていくのだろうと思った。

なぜ、遠のいていかなばならないのだろう。

ひとりでいることが多いから、遠のくことは悲しくはないが、祖母も母もますます私から遠ざかっていこうとしているようだった。

近ごろ、夕がた遅くまで外にいても叱らない、だれも。

怪我をしても文句をいわない、だれも。

新しい父が私に話しかけることは、まずない。寝込んでしまった祖母もめったに私に話しかけない。このごろなぜか停電ばかりする夜が連続している。

いつその家なんか、アメリカの飛行機にやつつけられればいい、と私は思う。以前、飛行機をみたら大声でバンザイと叫ぶんだよと教えてくれたのは祖母だった。そうすれば飛行機は爆弾落とすことはないからね、と。

頭上高く、夕がたの定期便が飛んでいく。

泣き顔のままみあげた瞬間だった。私の身体がふわりと宙に浮いた。

「なんだ、こいつ」

いまいましそうな声とともに私を米俵のように担ぎあげると、新しい父は大腿で歩きながら、揺さぶりをかけて私に悲鳴をあげさせようと試みていた。私は目をつむり歯を食いしばって耐えている。

庭先に着くやいなや私は雪だまりめがけて投げつけられていた。庭石に命中してもおかしくない角度だった。新しい父がバランスを崩したおかげで、大怪我だけは免れたのだった。あまりにも不様な倒れかただったので、新しい父はすばやく起き上がらねばならず、すばやく両肩にちからをこめねばならず、すばやく仁王立ちにならねばならなかった。これから私は、殴られるのだ。

起き出してきた祖母も制止する気配がない。新しい父が待ち望んでいた私への最初の鉄拳制裁がまもなく実行されようとしている。

新しい父はゆっくりと呼吸を整え、私の襟首を掴み、私を雪のなかから引きあげ、私に向けて大きく拳をふりかざしていった。私は、息を止めた。

「あー、脱脂綿欲しいんですが……」

騒ぎとは全然無縁の、猫のような目つきの老婆がこちらをみていた。

新しい父が雪の上に私を突き飛ばしたので、鉄拳制裁はひとまず延期だった。ただ、あくまでも延期なのだから、今回不発に終わった火種まで消えたわけではなかった。

暗い家の中にはクレゾール液の匂いが充満していた。祖母に往診の医者 came ときも同じ匂いだった。炬燵にはふたたび私だけが残され、新しい父と祖母は老婆に促されるように母の寢所に入ってしまった。

*

妹が生まれる前年の秋、

「ああ、ずいぶんと大きくなったこと」

猫のような老婆の、最初の訪問だった。玄関先に立つと、しゃんと背筋をのばして、なつかしそくに私の顔をのぞきこんだ。撫でるのかと思ったら、「やっぱり亡くなったさんに似てるねえ」と私の肩や頬のあたりをびしゃぴやと叩いた。

だれか知らない人に私が似ていると勝手にいうのは、たいへんおかしいことだった。ふだんでも唇が突き出ているうえ、怒るともつと口が尖ってしまうので、祖母は母親そっくりだとよく笑った。大事にする蟻地獄の巣を大人が踏みつけたりすると、私の顔は母の不機嫌なときの表情になるのだそうだ。母に似ているといわれれば、ああそうかと分かるけれど、まったく知らない人にそっくりといわれても私は困るしかなかった。

しかし、きつい目つきの老婆は私の家へ来るたび、似ている似ているとつぶやく始末だった。手のなかに握りしめてきたらしい大粒の飴玉を無造作に私の口へ押し込み、どすんと背中を叩いてはそのときだけ目を細めた。

ザラメを塗した飴玉は老婆の手汗がついていて塩っぱい味がした。飴玉をくれるのはうれしいけれど、ぬるぬる塩気を含む甘い唾液を飲み下すのは嫌だった。

仕方ないので私は根雪の上に口中の唾を吐き捨てることにした。すると思いがけず雪の

表面に蝶のような美しい染みができあがった。

口に溜る唾液を極限まで飲み込まないでいて、あふれるほどになったら勢いつけて雪の壁に吐きつけてみる。老婆の汚い汗の成分が飴玉の表面からなくなっても、私は唾液の様づくりにいそしんでみたくなった。

線香花火になったぞ。(赤い飴玉をもらったからだ。)

セルロイドの風車になったぞ。(みどりの飴玉をもらったからだ。)

黄色い飴玉のときは小出しに唾液を吐きつづけてみると、雪の結晶がゆっくり溶けて、何かの花びら模様ができあがっていた。

一晚過ぎるとその模様が根雪にすっかり張りついて硝子絵になっていた。(氷の層に閉じ込められたから春まで長持ちするぞ。)(私はあの老婆がつぎにどんな飴玉を握って来るのか、少しでもだけ気分を明るくしてすこすようになつた。)

こうして私は蟻地獄の冬眠中、新たな遊びに夢中になっていたが、巣穴だけは嚴重に困う仕事が残には残っていた。無頓着な大人が空き缶や空瓶を積み重ねたりするから用心しなければならなかったのだ。

新しい父に殴られずにすんだ日からまもなく、台所裏の巣穴に行きかけたときだった。新しい父が物置小屋の脇に穴を掘って、新聞包みを埋めようとしていた。日陰のためもあってか凍結した地面は思ったほどの深さにはならず、埋め戻しても残土で小山ができて、新しい父の作業は翌日までかかった。

そして、三日目の作業前、大きな異変が起こった。

野良犬か何かが埋めた穴を掘り返してしまっていたのだ。新聞紙が無惨に破られて、血のついた脱脂綿が気味悪く散らばっていた。私が蟻地獄の巣跡を観察する場所から、新しい父が穴を掘ったところまでは数メートルしか離れていない。不機嫌な舌打ちがしたので咄嗟に私は立ち上がったが、射抜くような目つきに押さえつけられてしまった。

「こつち、来い」

いいながら新しい父のほうに近づいて来た。「掘ったの、お前か？」

違う、と返答するより早く、雪の上に足あとがある。「ここにも、ほら、ここにも」と軍手で指さしながら穴のほうへと私を引き立てていった。

私はたしかに穴をみにいったが、それは掘り返される前のことだった。正確に言えば物置小屋の軒下にいっただけのことだ。あの軒下にも蟻地獄の巣穴があったからだ。だが、新しい父の剣幕はどんな抗弁をも寄せつけず、鉄人のようにまっすぐ私に迫ってくる。

こんどこそ。

私は、殴られる。

先日と決定的にちがうのは、だれもみていないということだ。つまり偶然であろうがどうだろうが制止する者がだれもない。たぶんあの日の分と合計して、新しい父は蓄積しているすべてを炸裂させるにちがいないのだった。そうしてその絶好のチャンスが、一刻、到来しつつあるのだった。

「こんなもの見たいってか？ 苦労して埋めたものを、わざと掘り返すってか」

私をみる目つきのうちでも、いちばん嫌な顔だ。

「悪いことかどうか、しっかり教えてやつからな」

新しい父は余裕のある薄ら笑いを浮かべた。この前と同じように静かに拳をふりかざして、私の襟首を掴みにかかった。ああ、こんどこそ、だ。私は、目をつむった。

「……お晩でやんす。赤ん坊に牛乳持って来やんした」

振り向くと、私たちの背後に立っていたのはトヨだった。

赤ん坊にはなく、母の体力回復のための牛乳だった。祖母が頼んでいて、私の父の実家からトヨが運んで来たのだった。

新しい父は無愛想にトヨから一升ビンを受け取り、私たちに背を向け母家に戻っていった。

「兄ちゃんになったんだね、春から四年生だね」

久しぶりの姪は手袋のまま私の頭を撫でたが、私は新しい父が、二つ分の仕返しを忘れるわけではないだろうと、そのことだけが恐ろしく、気がかりだった。

*

その冬は、赤ん坊の泣き声と襦袢とが家中にあふれて根雪が少しずつとけていった。

春が来て、姪のいうとおり私は四年生になった。

なんとなく何かがちがうと、私は思った。

一年生から二年生になるのでもなく、二年から三年に進むのでもない。四年生になったこと自体、何かがちがったのだ、自分にとって……。

新学期から学校の帰途、私はたった一つ困ることで悩んでいた。

どっちにするか。

真剣に迷う日もあり、単純に決めやすい日もあった。

校門を出て橋を渡り、バス通りにぶつかると丁字路になっている。右へ曲がると本当の父の実家であり、左へいくと私の家だった。新学期早々、私は週の半分を右へ折れる選択をしていた。自分の家へ帰る道のりと、本当の父の家までの距離とでは、父の里のほうが倍以上あるのに、それでも私は右の道を選んでいった。

四年生になっても寝小便癖のなならない私が、父の実家にいくことを母は快く思っていなかった。お前は何に神経を使ってるんだろつかねえ、と赤ん坊の襁褓に加えて私の夜具の始末にも手を焼く母は、

「こんなに迷惑かけてるんだから、あの家にはいかないでくれ」

私が父の実家に行くと、戦死した　さんにそっくりだ、とあの老婆と同じことをみんなからよくいわれた。トヨからは目と鼻つきが似ているといわれた。

本当の父の実家は草葎き屋根の大きな家だった。

夏になると、その藁屋根に赤い車百合の花がいつぱい咲いた。その百合の匂いが泊まり込んだ蒲団の上にまで降ってくるようだった。蒲団を被っていると、水底に横たわっている夢をよくみた。水の流れがなくても海藻が風のように揺れていた。海藻の夢をみると気が持ちが休まり、寝小便にくっしり濡れて私は目をさました。トヨの母が風呂の残り湯で私のからだを丁寧洗ってくれた。風呂場の窓越しにカラマツ林が眺められ、その林の角にいずみの家がみえた。

*

いずみは、姪のトヨと同じ小学六年生だった。

ぼつてりと丸く白い顔に艶のない髪をおさげに結って、学校の廊下ですれちがっても、いつもしらない顔をしていた。トヨのところへ遊びに来ているときでさえ、私に直接話しかけたりしないほど無口で、怒ったような顔のままのつまらない上級生だった。

それでも学校が終わるとトヨの家に足を向けてしまうのは、新しい父と、妹が生まれて癩癩気味になった母が嫌でしょうがなかったからだ。家族全員、そっぽを向いたような顔つきが嫌だったからだ。そんなわが家と比較して、本当の父の家に行くと、すっかり気がやすまった。赤ん坊の泣き声だけのわが家にくらべ、本当の父の家にはトヨやいずみが待っていた。

外は六月になり、郭公の鳴き出す季節が訪れていた。

ひとしきり細かい雨が降ると、いつせいにほたるぶくろが畦道に咲きはじめていた。

薄いむらさきの花は、たそがれを追うように長い行列をつくって父の里までつづく。この花のかすかな匂いが、いずみのようだった。畦道に入ると、これから先は目を閉じて歩いて、いずみたちがいる。いずみたちにあうために、私はほたるぶくろの道を歩いていった。

さらに新学期から私のランドセルには、だれにも負けないものが入っていたのだった。乱暴にランドセルを揺すっても脆く折れたりしない新品のクレヨンだった。同級生の十二色とは全然別物で、私のクレヨンはその三倍、三十六本入りなのだった。

祖母が行商で訪れる人に頼みこみ、にぎやかな遠くの町から買い求めたものだった。母も祖母も学校のことに関してだけは熱心だった。

同級生たちがサイズの大きな詰め襟をだぶだぶと着ていても、私だけ母の着物を仕立て直した開襟の子供服を着せられて通学した。白シャツに茶褐色のネクタイを締めると母はかならず私に向かっていった。

「背広に似せて作ったからね。ころんだり、喧嘩したりするんでないよ」と念を押す。

「背広を着て学校に行くんだ」と私も胸を張って応える。

そればかりではない。ノートも再生紙ではなくて、私のだけ雪のように真っ白だった。(これはずっと後で聞いたことだが、この発案はすべて祖母がいただいたことだったそうだ。粗末なもので出費を重ねるより、良い道具を一回買って大切に使用せるといったのが祖母のかがえであったという。)

その高価なクレヨンを、くじ引きの景品にしたことがばれたとしたら、祖母はどんなに嘆くことだろう。上級生たちの遊び仲間に私が割り込んでいくための緊急手段だったとしても、大人たちが容易に納得するわけはなかった。

要するに、この場合はどちらが今最も大事かという選択でもあった。しかし躊躇している段階ではなかった。私は大胆にも、小学ノートを引き裂きちぎる道を選んだ。いずみが大当たりする阿弥陀くじを、まず私はかがえた。

ところが、このたくらみが、どうしても計算どおりにいかない。

いずみの勘が鈍いのか、トヨのくじ運が強いのか、いずみの手もとにクレヨンの数が全然ふえない。抽選の回数を重ねても、いずみは外れてばかりで、トヨの手にだけクレヨンがふえていく。しまいにはトヨはクレヨン箱までおまけにしるといい張ってきかない。入

れ物まで取りあげられたら、祖母にどう説明できるだろう。どうせ失うなら、私としては箱ごといずみにこそあげたかった。祖母が買ってくれた大切なものを、いずみが持っているのなら、だれの責めでもがまんできる。

「こんどの当りはケース付きだよ」

トヨは早くも腕まくりして阿弥陀の上に身を乗り出す。おさげの髪が汗臭い。六年生はみんな中学入学にそなえて、髪を伸ばしはじめていたのだった。

「どつち？」

いずみの先攻にしようとしても、感謝の表情もなく無言で棒線を指さすだけだった。照れ性なので、トヨのように大口開けて、みっともない笑いかたもしないのだった。

「わあーい大当たり。もうそのケースも、こっちのもんだよね」

大仰にトヨが万歳したとき、もはや私の手には三四本のクレヨンが残っているのみだった。この最後まで除外しておいた金色と銀色、後はどうでもいい白とか黒とか茶色とか。

金と銀だけは誰からも羨ましがられる宝物そのものだった。たとえば朝日が輝いている場面の仕上げでも、ともだちは困りはてていたのだ。軍艦や戦闘機の胴体を完成する場合あの鈍い金属の微妙な光沢は、この金銀こそがものをいう。惜しげもなく使いこなす私の横で、ともだちは黒とか灰色系のクレヨンでみすばらしい戦闘機や軍艦の絵を描いていたのだった。

「さあ、全部よこしなさいよ」

トヨの催促に負け、ついに箱ごと巻きあげられそうになり、私はあわてて金銀の二色をいずみの手に押しつけ、「これ、残念賞だよ」と一気に入った。

「いちばんいいのが残念賞？ そんなのうれしいよ」

トヨが大口をあけて抗議してきたが、私はすかさずいった。

「あげる人の勝手だもんね」

箱ごとよこせというトヨのねらいは、金と銀こそお目当てだったのだ。ずるいよ、ずるいと不満顔のトヨの舌が、インキを舐めたように紺色に染まっていた。私がトヨに向かって尖らす唇もたぶんインキ色であり、いずみのふくらんだ両頬にも点々と桑いちこの汁が付着していた。

大事なクレヨンをまるごと失いはしたけれど、トヨたちの間にすっぽり嵌まり込む作戦は大成功にはちがいがなかった。すべての遊びにおいて私は対等の資格で迎え入れられるようになったからだ。

「浴衣を縫ってあげたからね。川へいっていいよ」

伯母が、トヨの浴衣を新調したのにあわせて私の分も作ってくれていた。

早くも四五日前から浴衣姿になったいずみを先頭にして川べりにいそいだ。

先を歩くいずみの浴衣は短かすぎ、膝小僧から下がすっかり露出していた。顔は青白かったが、むき出しの腓は柔らかい弾力をみせ、草の上に膝をくずして座ったりすると、薄い皮膚の下にゆるやかな光りの帯が走ってみえた。その光りの帯は腓に限ったことではなく、いずみの肩や肘や腰にもあるのだということ、私は川原に到着してから分かったのだ。

道路からはみえない場所だったので、率先してトヨたちは裸になった。ここではそうして遊ぶのだろうと私も浴衣をすぐ脱いだ。いずみもトヨも水をかけあって、別人のようなはしゃぎぶりだった。

浅瀬を渡って向こう岸に辿り着いたトヨが私に叫んで命令する。

「号令かけてー。いずみちゃんと競走すつからー」

四五間前方にふたりの白い裸身が並んでいる。背文はトヨが勝っていたけれども、それだけ痩せていた。いずみは腰のところがふわっと盛り上がって大人と同じようにみえる。

「よーい、どん」

ふたりは、思い思いに両手を振りながら一直線に私へ向かって来る。足裏から水しぶきが舞い上がり、幾筋もの太陽光線がふたりを囲む。近づくと乳房が揺れて、まぶしかった。

「だめだよ。よーいといったら、すぐ、どんといわないと」

負けたトヨが文句をいう前に、いずみはさも大儀そうに川から這いあがり石畳に白いからだを横たえた。トヨのように荒い呼吸をするわけでもなく、私のほうをちらりとみあげて、にこりと笑った。

あ、いずみが笑った。

このな顔つきは阿弥陀のときだってみせなかったぞ。

これで、決まりだった。

夏休みは、本当の父の家に来ていたい。いずみが笑うのを、もっとみていたい。

*

日照りの夏が、祖母を苦しめる病気に味方していた。

冷たい沢の水汲みは私の役目であった。毎日のように祖母はこの水を飲みたがった。病いの床からふたたび起き上がって、えんがわの日溜まりで私の半ズボンを縫ってくれるのなら、厭わず沢の冷たい水を汲みつけよう……。薬缶にあふれる水を、自分もごくごく飲みながら、私は何度念じたか分からない。

それなのに、耳もとに張りついて悲鳴をあげるような、ひぐらしの騒々しい夕べ、祖母は、蝉の鳴き声に見守られて息を引き取った。

その晩は、流れ星がつきつきに消えていくふしぎな夜だった。しかけ花火が失敗したときのように、とめどなく私の目に流れ込んでくるのだった。お前の父ちゃんが南洋の島から帰って来ようとしているんだね、流れ星を数えながら、そんなことを祖母がいつていたのは、いつのことだったろう。

四年生の夏休みも終わろうとしていた。

雨無しなのに、今年はどうしてか蟻地獄もない夏だった。

いずみが、一家あげて北海道の炭鉱町だけに引越していったと聞いたのは、祖母の葬式に来たトヨからだった。

トヨは来年中学で着るはずのセーラー服になり、神妙に線香をあげていた。

いずみもあのすづまりの浴衣を脱いで、セーラー服に着替え、この町から出ていったというのだろうか。

新しい父が、きよろきよろするなと先刻から背中をしきりに小突くけれど、私は無視しつづけた。他人の目からみたら、自分でも気づかないうちに少しずつ生意気になって、新しい父がひそかに待ち望む、気絶するほどの鉄拳制裁も、そう遠くないうち思う存分浴びせかけられるにちがいない、こんどこそ、その機会は外れることはないだろう、そのときは本当に味方はだれもないのだ、と私は思った。

タイトル「蟻地獄」

本名 藤森 重紀

住所 〒一九四一 二二 東京都町田市下小山田町一 二九一二

電話 四二二七九七二七六八九

職業 教員

略歴 一九四四年岩手県生まれ

第五四回岩手芸術祭賞「深海魚」

第三回白鳥省吾賞「再会の挨拶」

第三 回部落解放文学賞「位牌を削る夜」

詩集『凝視感覚』 / 『半世紀回想』 / 『雪 行列』(龍工房)

日本詩人クラブ、横浜詩人会、火山弾の会所属

四 字詰原稿用紙換算 三五枚

生年月日/年齢 一九四四年五月一九日/六 歳